View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

天皇行幸のはじまり（一五～六）

Memory of The Origin about The Emperor's Travel—Study of "Manyousyu" Song No.5-6—

中村学園大学　流通科学部
福沢　健

●はじめに

『万葉集』巻一は、舒明天皇の時代の歌として、香具山の国見の歌（一二）、宇智の野の遊猟の歌（一三～四）と並べるかたちで、天皇が讃岐国安益郡網の浦に行幸したとき軍王が作った歌（一五～六）を載せています。『万葉集』巻一が、香具山の国見の歌を載せたのは、以後、飛鳥・奈良朝と続いていく押坂彦人大兄皇子系の王朝が舒明天皇の時代から始まることを明示するためでした。宇智の野の遊猟の歌を載せたのは、舒明天皇の後宮の中心となるのは中大兄皇子・大海人皇子を産んだ宝女王であることを示すためでした。『万葉集』巻一は、和歌を並べることによって、独自の「歴史」を語っています。このような視点で考えると、軍王の行幸従駕歌にはどのような意味が与えられているのでしょうか。本稿では、軍王とは誰かという問題の再確認を通して、この問題について考えてみたいと思います。

●隋の中国統一と高句麗出兵

五～六番歌のお話しをする前に、まず六世紀末から七世紀中頃までの北東アジアの国際情勢についてお話ししておきましょう。

隋の開皇八年（五八八）の年末、長江の北岸の六合には、晋王楊広（後の煬帝）に率いられた隋軍五十万が集結していました。六合は、陳の首都である建康の対岸に当ります。開皇九年（五八九）正月一日、建康一帯に立ちこめた濃霧を利用し、隋軍は長江の渡河を開始します。隋軍の渡河は、まさか元旦に軍事活動はあるまいという陳軍の油断によって成功します。十二日、隋の猛将韓禽虎の指揮する先鋒隊五百は、建康城の正門である朱雀航を突破して、城内に攻め込み、陳の皇帝の陳叔宝を捕らえることに成功します。陳叔宝は愛妾張貴妃と共に井戸に隠れていたのを、見つけ出されたのでした。蜀の諸葛孔明の天下三分の計の献策以来、南北に分裂していた中国は四百年ぶりに統一されたのでした。

国内の統一に成功した隋は、その軍事力を外征に振り向けます。その標的になったのは、隋の北東に位置する高句麗でした。高句麗は、シルクロードの北方に位置する突厥と同盟を結んで、隋の北方に勢力を広げていました。開皇一八年（五九八）、隋の初代皇帝文帝は漢王楊諒に水陸三十万の軍を授け、高句麗討伐を命じます。隋の第一回高句麗遠征は、陸軍は大水・疫病・食糧不足で壊滅、水軍も暴風雨に巻き込まれて壊滅し、惨憺たる大失敗に終わりました。

二代皇帝煬帝の時代になると、さらに大規模な高句麗遠征が行われます。大業八年（六一二）正月、煬帝が自ら率いる三百万の大軍団が幽州の涿から高句麗へと進発しました。全軍は毎日一軍ずつ出発し、全てが完了するまで四十日かかったといいます。隋の第二回高句麗遠征軍は、国境に位置する遼東城を落とせず、遼

東城を迂回した一部の軍団は高句麗の首都である平壌に迫ったものの、平壌の手前の薩水において高句麗の将軍乙支文徳の水攻めにあって大敗を喫し、七月に撤退を余儀なくされます。遼水を渡った三十万の兵員の内、生還したのはわずか二千七百人。隋の第二回高句麗遠征も大失敗に終わったのでした。煬帝は高句麗討伐を諦めず、大業九年（六一三）、大業一〇年（六一四）にも高句麗遠征軍を派遣しますが、遠征に疲れた兵員の逃亡によりいずれも失敗します。隋の国内では反乱が続出し、大業一四年（六一八）三月、煬帝は殺され、隋は滅亡します。

●唐の高句麗出兵とその影響

隋末の混乱状況を収拾したのは、長安・洛陽の北方の要衝である太原の留守であった李淵でした。李淵は、次男の李世民（後の太宗）の活躍によって長安を陥落させ、義寧二年（六一八）三月、隋の代王恭帝から禅譲を受けて、唐を建国します。禅譲とは、血縁にこだわらず、徳の優れた者に皇位を譲ることをいいます。古代中国の王朝交替は禅譲という型式を取りました。初代皇帝太祖の後を継いだ二代皇帝太宗は、貞観の治という善政を行い、唐の国力を著しく増強しました。太宗は軍事・内政に手腕を発揮し、唐の最も優れた皇帝として評価されています。貞観四年（六三〇）、太宗はシルクロードの北方を脅かしていた突厥を滅ぼします。太宗の次の標的は、高句麗をはじめとする北東アジアの国々でした。

北東アジアの国々は、唐の動きに反応します。百済の義慈王二年（六四二）、前年に即位した義慈王は、異母弟の扶余豊璋から太子の資格を剥奪し、豊璋とその弟の善光を人質として倭へと追放します。高句麗では、同じ六四二年（高句麗の年号では栄留王二五年）、対唐強硬派の大臣泉蓋蘇文がクーデターを起こし、融和派の栄留王と有力貴族百八十名余りを殺害し、傀儡である宝蔵王を擁立します。百済・高句麗のこのような動きは、対唐戦争を戦い抜くために、自らに権力を集中させるための措置でした（注1）。

同様の動きは、海を隔てた倭にも波及します。皇極二年（六四三）十月、蘇我蝦夷は息子の入鹿に独断で大臣の位を譲ります。十一月、大臣となった入鹿は斑鳩の山背大兄王を攻め滅ぼします。親新羅の有力王族である山背大兄王を滅したのは、百済を支援して、いざというときには唐と戦うための体制作りの準備の第一歩でした。入鹿が目指したのは、高句麗の蓋蘇文のように、傀儡として古人大兄皇子を天皇として擁立し、軍事政権を樹立することでした（注2）。

貞観一八年（六四四）十一月、李勣を総司令官とする唐軍水陸三十万は高句麗遠征に進発します。李勣は唐建国の功臣で、歴戦の名将として知られていました。翌貞観十九年（六四五）二月、太宗も自ら高句麗へと出陣します。唐軍は隋軍が落とすことが出来なかった遼東城をやすやすと陥落させ、そのまま南に進み、安市城を包囲します。しかし、安市城を守る楊万春の奮戦により、安市城は陥落せず、冬を前に九月唐軍は撤退します。安市城包囲戦に際して、万春の放った矢が太宗に当たり、右目を失う大けがを負わせたことも、撤退の原因の一つでした。唐軍は安市城を落とすことは出来なかったものの、安市城救援のために派遣された高句麗軍十五万を壊滅させるなど、戦術的な勝利を収めており、余力を残しての撤退でした。帰国後、太宗の健康状態はすぐれず、貞観二三年（六四九）に太宗は崩御します。太宗の崩御によって、唐の第一次高句麗遠征は終了したのでした。

唐の高句麗遠征の影響は倭に及びました。太宗の出陣の四ヶ月後の皇極五年（六四五）六月、入鹿の反唐政策に不安を覚えた中大兄皇子・中臣鎌子・蘇我石川麻呂は、入鹿を謀殺します。乙巳の変です。乙巳の変には、中大兄皇子が自らの身を守るために起こしたクーデターとしての側面もありますが、当時の国際状況か

ら考えると、唐と戦争を避けようとする政治グループによる蘇我氏に対する反撃という側面も窺えます（注3）。乙巳の乱によって即位した孝徳天皇（皇極天皇の弟。この時に中大兄皇子が即位しなかったのは、年齢が足りなかったと考えられています）は、強力に親唐路線を推し進めた天皇でした。天皇は、白雉三年（六五四）、白雉四年（六五五）、立て続けに遣唐使を派遣しています。則天武后の第二次高句麗遠征を目前に控え、唐との戦争を避けるために派遣された使者でした。

朝鮮半島の三国のうち高句麗・百済は反唐の立場でしたが、親唐路線を取ることによって生き残りを賭けた国もありました。善徳女王の治める新羅です。唐の第一次高句麗出兵の前年に当たる仁平十年（六四三）、高句麗・百済連合軍に攻められた新羅は、唐に救援要請をしました。このとき、唐は、準備不足もあり出兵を見合わせ、女王による統治を非文化的であると批判して、女王の退位と唐王族の即位を求めました。この唐の要求は、新羅の宮廷内で親唐派と反唐派との対立を生み出しました。第一次高句麗出兵の二年後の仁平一四年（六四七）、唐の提案を受け入れて善徳女王は退位するべきだと主張する毘曇によって率いられた花朗徒が、反乱を起こします。毘曇は唐の高句麗制圧は時間の問題だと考え、唐とより強いつながりを求めて生き残りを計ろうとしたのです。毘曇の乱の最中、善徳女王は崩御しますが、すぐさま妹の真徳女王が即位し、乱も十日で収拾します。この混乱の収拾においては、王族の金春秋と将軍の金庾信が活躍しました。以後、金春秋に率いられた新羅は、唐に従属しつつも新羅の独自性を守るという難しいバランスを取りながら、動乱の時代を生き残ろうと画策することになります。

六四〇年代、北東アジアの国々は連鎖的にクーデターを起こします。これは、四百年ぶりに中国を統一した隋・唐という巨大帝国出現のインパクトによるものです。乙巳の乱も、日本国内の勢力争いという視点だけでなく、唐の高句麗出兵という文脈の中で見ていく必要があるでしょう。

●望郷の思い

では、ここで万葉集に戻りましょう。舒明天皇の時代（六二九～六四一）は、ちょうど唐の太宗が即位して、唐の国力を著しく増強させている時期と重なります。

讃岐国安益郡に幸しし時、軍王の山を見て作る歌

①霞立つ　長き春日の　暮れにける　わづきも知らず　村肝の心を痛み　鵠子鳥　うらなけ居れば　②玉たすき　懸けのよろしく　遠つ神　わご大君の　行幸の　山越す風の　独り居る　わが衣手に　朝夕に　還らひぬれば　③大夫と　思へるわれも　草枕旅にしあれば　思ひ遣る　たづきを知らに　網の浦の　海処女らが　焼く塩の　思ひそ焼くる　わが下ごころ（一五）

反歌

④山越しの風を時じみ寝る夜おちず家なる妹を懸けて偲ひつ（一六）

右、日本書紀を検ふるに、讃岐国に幸すこと無し。また軍王も未だ詳らかならず。ただし、山上憶良大夫の類聚歌林に曰はく、記に曰はく、天皇十一年己亥の冬十二月己巳の朔の壬午、伊予の温湯の宮に幸すといへり。一書に、是の時に宮の前に二つの樹木あり。この二つの樹に斑鳩・比米二つの鳥さはに集まれり。時に勅して多く稲穂を掛けてこれを養ひたまふ。すなはち作る歌といへり。けだしここより便ち幸ししか。

はじめに五～六番歌の内容を見ていきましょう。五番歌は長いので、便宜的に①②③の三つに分けて説明します。

まず、五番歌の①です。「わづき」は語義未詳ですが、「区別」の意を表わすと考えられています。歌い手は、まず、長い春の日が暮れて「わづき」が分からなくなるように、「わづき」が分からないほど心が痛むとうたっています。この心の痛みとは、大和への望郷、さらに言えば家で待つ妹への思いでしょう。望郷の念に耐えられず、歌い手は、トラツグミが鳴くように夜に声を上げて鳴くのでした。トラツグミは、夜に口笛のような声を立てて鳴きます。ここまでが、①の内容です。

次に②の内容を見ていきます。「玉たすき　懸けのよろしく」は分かりにくい言い方です。ここでの「かけ」は、「玉たすきを肩に掛ける」と「口にかける＝歌としてうたう」の意が重ね合わされています。このように一つの言葉に二つの意味を重ね合わせる技法を、掛詞といいます。「玉たすき　懸けのよろしく」は、「玉たすきを肩に掛ける」ではないが「口にかけるのに具合のよいことに」という意味になります。「かけ」という掛詞は、上下の文を尻取りのようなかたちでつないでいることが分かります。掛詞でつながれている二つの文は、上の文が「景」を表わし、下の文が「情」を表わします。掛詞は、景と情とを融合させて、うたわれている心情に具体的なイメージを与えるために用いられる技法です。

では、何が「具合のよいことに」だったのでしょうか。これは、後の部分を「遠つ神　わご大君の　行幸の　山越す風」が「独り居る　わが衣手」に、「朝夕に　還らひぬれば」と整理してみると分かります。故郷への思いをうたうのに都合のよいことに、「山越の風」が「わが衣手」を吹き返したのです。そして、「風が衣を吹き返す」と「故郷へと帰る」とが掛詞になっていて、その風が歌い手に対して「帰れ」「帰れ」と言っているように聞こえる、とうたわれています。この風は、故郷の大和から吹いてくるのでしょう。だから、風によって望郷の念が引き起こされるのです。

次は③です。「大夫」は、天皇に仕えるに相応しい立派な男子のことです。「大夫と思へるわれ」は、「思ひそ焼くる」に掛かります。大夫は天皇に仕えなければならないので、故郷への思いは隠さなければなりません。だから、帰りたいという思いは「下ごころ＝表面には出してはいけない心」とうたわれているのです。「思ひ」は「火」と掛詞になっており、この掛詞は、我が思いは火のように燃えるのだというように、故郷に対する思いの強さを表わしています。「思ひそ焼くる」の上の「網の浦の　海処女らが　焼く塩の」は、「網の浦の海人の少女たちが塩を作るときに火が焼ける」のではないが「我が思ひが焼けるのだ」というように、「火」「焼くる」を導き出す修飾句となっています。このような修飾句を序詞といいます。また、「大夫と思へるわれも」の後の「草枕　旅にしあれば　思ひ遣る　たづきを知らに」は、「旅の途中なので、思いを晴らす手段が分からないので」の意で、故郷への思いが抑えられない理由が提示されています。大夫ならば天皇に仕えることに集中しなければならないはずなのに、故郷への思いを抑えることができないので、隠していたはずの燃える思いを抑えきれないのだ、というのが③の大意です。

最後に反歌の六番歌について説明しましょう。「時じみ」とは「途絶えることがないので」の意味です。「寝る夜おちず」は、「寝る夜は一晩も欠けることなく＝毎晩毎晩」の意です。「妹」は故郷で待つ「妹」のこと。望郷の中心には、家で帰りを待つ「妹」の姿があります。「かけ」は長歌の②の「玉たすき　懸けのよろしく」と同じく、「口にかける＝歌としてうたう」の意味です。反歌では、故郷である大和から吹いてくる「山越の風」が途絶えることがないので、毎晩毎晩、故郷の「妹」のことを、歌にうたって偲ぶのだというように、長歌でうたわれた望郷の思いが繰り返されています。

●天皇行幸

舒明天皇が行幸した讃岐国安益郡網の浦とは、現在の香川県宇多津町（坂出市と丸亀市の間にあります）付近の海岸を指します。宇多津町に網の浦万葉公園があります。左注に「右、日本書紀を検ふるに、讃岐国に幸すこと無し」あるように、『日本書紀』には舒明天皇の讃岐行幸の記事はありません。『日本書紀』に載せられる舒明天皇の行幸は、舒明三年（六三一）と十年（六三九）の有間温湯行幸、十一年（六四〇）の伊予温湯行幸の三回です。左注は、伊予温湯行幸を挙げて、「けだしここより便ち幸ししか」と伊予温湯行幸のついでに網の浦に立ち寄ったのではないかと推測していますが、確証はありません。では、なぜ『万葉集』では、舒明天皇が大和から遠く離れた網の浦に行幸したと伝えられたのでしょうか。ここで、古代の行幸について見ておきたいと思います。

仁藤敦史（注4）は、天皇の行幸を律令制以前の大王行幸と律令制以後の天皇行幸に分類しています。大王行幸は、周辺の諸豪族を征服するために行われました。一番歌は雄略天皇の妻問いの歌でしたが、妻問いも大王による豪族征服の手段の一つでした。前代の天皇の歌の代表として『万葉集』の冒頭には、古いタイプの大王行幸の歌が載せられたのです。大王行幸は、大王の住む大和の周辺で行われます。

一方の天皇行幸とは、中国の天子巡行をモデルとしたもので、山川の望祀、諸侯の巡視、民衆の教化を目的とします。紀元前一世紀頃に成立したと考えられている中国の儀式書『礼記』の王制には、

天子は五年に一度巡守する。その年の二月に東に巡守して、泰山に登って、その山頂で柴を焼いて、山川を望祀する。巡守を行いながら、地方を治める諸侯の様子を視察して、百年以上生きた老人の話を聞いて、その様子を観察する。大師に命じて詩を歌わせて、人民の様子を観察する。

とあります。仁藤は、中国の天子巡行も日本の天皇行幸も、その本当の目的は、華やかな行列を民衆に見せることによって、皇帝・天皇の権力の強大さを国の隅々にまで誇示することにあったと述べています。天皇行幸の目的は国土の視察・権力の誇示ですから、むしろ大和から遠く離れた辺境において行われます。辺境にまで巡行することが、皇帝・天皇の権力が国土にあまねく広がっていることの証明となるからです。

以上の点から見て、『万葉集』巻一が讃岐という辺境の地に舒明天皇が行幸したと記すのは、この行幸が天皇行幸の理念に基づいた国土の視察であったことを述べていると考えられます。辰巳正明（注5）は、舒明天皇を始祖的な天皇として位置づけるために、『万葉集』は舒明天皇の時代の歌として《望国》《遊猟》《行幸》という天皇儀礼の始原の歌（後世の歌の規範となる歌）を並べたと述べています。《望国》の歌は二番歌、《遊猟》の歌は三～四番歌、《行幸》の歌は五～六番歌です。後世の天皇行幸の歌を見ると、そこでは繰り返し望郷の念がうたわれます。五～六番歌は天皇行幸の始原の歌として、『万葉集』巻一の冒頭部に載せられているのです。

●軍王

次に、五～六番歌と北東アジアの国際情勢との関係についてお話ししたいと思います。両者をつなぐキーワードは軍王です。

軍王が誰かは明確ではありません。青木和夫（注6）は、『日本書紀』雄略天皇二三年条で、百済王加須利君から遣わされた王弟尹貴が「軍君（こにきし）」と呼ばれていることを根拠として、コニキシは百済王族に対する尊称であると述べています。そして、

青木は舒明朝の軍王は百済王子扶余豊璋であると推測しています。

先に述べましたように、豊璋が来日したのは斉明天皇元年（六四二）六月なので、舒明朝に豊璋の歌があるというのは不審です。これと関連する事項として、五～六番歌が舒明天皇の時代の歌ではなかったという意見があることは注意されます。稲岡耕二（注7）は、五～六番歌に見える用言に掛かる枕詞が柿本人麻呂の時代に現れることを指摘して、この二首は人麻呂が活躍した持統朝（六九〇～六九七）に作られた歌ではないかと推測しています。豊璋が舒明朝に来日していないこと、表現が持統朝の頃のものであること、そして、舒明天皇の讃岐行幸の記録がないことから考えると、『万葉集』巻一は、始祖的な天皇の《望国》《遊猟》《行幸》の歌をそろえるために、後世（持統朝）の行幸従駕歌を舒明朝の歌として転用したのが五～六番歌である可能性が高いように思われます。持統朝の行幸従駕歌の作者は、軍王ではなかったでしょう。それを軍王の歌としたのは、『万葉集』巻一の編集作業上の措置であったと考えることができます。

では、なぜ『万葉集』巻一は、このような手の込んだ作業を行わなければならなかったのでしょうか。これは、『万葉集』巻一の編集方針（『万葉集』巻一がどのような歴史を語ろうとしているのか）において、はじめての天皇行幸の歌の作者は軍王でなければならないと考えられたからだと私は考えています。

斉明六年（六六〇）、百済は唐軍の攻撃によって滅亡し、義慈王は長安へと連れ去られます。百済の遺臣鬼室福信の要請に応えて、豊璋は百済王に即位し、倭国と連合して対唐戦争を継続します。しかし、天智二年（六六三）年、白村江の戦いで、倭・百済連合軍は唐軍に大敗を喫します。豊璋は高句麗へと亡命しますが、天智七年（六六八）、高句麗も唐軍の攻撃によって滅亡し、豊璋は高句麗の宝蔵王と共に長安に送られ、その後、嶺南（現在の香港・澳門付近）に流罪に処せられました。豊璋の弟の善光はそのまま倭に留まりました。持統七年（六九三）、善光は百済王の姓を与えられました。百済王の一族は、奈良時代から平安時代初期に活躍しました。中でも、天平二一年（七四九）、陸奥守百済王敬福が、聖武天皇に毘盧遮那如来の鍍金作業に必要な黄金九百両を献上したことは有名です。

百済王家は、「小帝国」たることを目指す日本国にとって欠くべからざる存在でした。神野志隆光（注8）によれば、「小帝国」とは、「世界帝国」たる中国に対する呼び名で、中国王朝に従属せずに自ら一つの世界であろうとするものです。その世界観とは次のようなものです。まず、王の直轄領となる畿内があります。そして、その周辺には化内の諸国があります。化内とは、天皇による風化の及んだ土地を指します。化内の諸国とは、例えば武蔵国、相模国、上総国、下総国、安房国、常陸国、上野国、下野国などの、国司が置かれている諸国です。さらに、その外部に化外の国があります。大宝元年（七〇一）に制定された大宝律令は、化外の国々を区分して、唐を「隣国」、朝鮮諸国を「諸蕃」、蝦夷・隼人・南島人を「夷狄」と規定しています。「隣国」は対等の関係ですが、その他の国々は日本に従属する朝貢国です。日本は、唐をモデルとして、周囲に朝貢国を従える中華帝国となることを目指したのでした。中華帝国は世界の中心に建設されます。したがって、唐以外に中華帝国が存在することはありえないことでした。大宝律令の制定によって日本国（倭国が日本国になったのは、大宝律令の規定によると考えられています（注9）は小帝国を目指すことになりましたが、その主張は、日本の一方的な主張で、諸外国からすんなりと認められるものではありませんでした。事実、後世、新羅・渤海との間で、両国の関係について繰り返しトラブルが生じました。このような状況を踏まえて考えて見ると、日本国に百済王がいるという事実は、たとえ形式的なものであったとしても、日本国が多くの朝貢国を従える帝国であることを保

証する重要な証拠だったということが分かります。

●まとめ

舒明天皇の行幸に百済王が従うことは、この行幸が中国の天子巡行と等しいものであることを示しています。『万葉集』巻一は、舒明天皇から始まる王朝が「帝国」であることを主張するために、「軍王」の歌を舒明朝の歌として載せたのでした。倭国が「小帝国」を明確に目指して、インフラ・制度を整備したのは持統朝のことだと考えられています（注10）。実際の天皇行幸も持統六年（六九二）の持統天皇伊勢行幸から開始された（注11）ので、舒明朝に天皇行幸が行われたとは考えにくいようです。五～六番歌は、はじめての天皇行幸の歌として後世（おそらく持統朝）に作られました。「小帝国」は、始原の天皇である舒明天皇の時代から存在している確固たる体制であるという「歴史」を、『万葉集』巻一は主張しているのです。

注1　鈴木靖民「七世紀中葉の百済の政変」、『日本の古代国家の形成と東アジア』吉川弘文館、二〇一一。
注2　福沢健「天香具山の国見―『万葉集』1二―」、「中村学園大学流通科学研究」14―2、二〇一四。
注3　福沢健「乙巳の変と『万葉集』1三～四」、「中村学園大学流通科学研究」15―2、二〇一六。
注4　仁藤敦史「古代王権と行幸」、『古代王権と官僚制』臨川書店、二〇〇〇。
注5　辰巳正明「舒明朝万葉歌の形成」、『万葉集と中国文学　第二』笠間書院、一九九三。
注6　青木和夫「軍王小考」、『上代文学論叢』桜楓社、一九六八。
注7　稲岡耕二「軍王作歌の論」、『万葉集の作品と方法』岩波書店、一九八五。
注8　神野志隆光「持統朝と人麻呂作歌」、『柿本人麻呂研究』塙書房、一九九二。
注9　吉田孝「律令国家の構想」、『大系日本の歴史3　古代国家の歩み』小学館、一九九二。
注10　神野志前掲書。
注11　福沢健「柿本人麻呂留京三首と伊勢行幸」、「美夫君志」五〇、一九九四。